「大山寺博労市図」／鳥取県立博物館所蔵

平成30年 大山開山1300年

大山古道 MAP

日本遺産認定

JAPAN HERITAGE

地蔵信仰が育んだ日本最大の大山牛馬市

大山山頂の池に現れた恵みの水と万物を救う地蔵菩薩は、農耕に欠かせない牛馬の安全を願う人々を信仰の中核となる大山寺へと集め、明治時代には日本最大規模の『大山牛馬市』が開催された。大山寺・牛馬市を目指す人や牛馬が往来し、美しい自然や独自の文化が今も息づく大山町、伯耆町、江府町、米子市のエリアを結んだストーリーは、平成 28 年4月、文化庁の日本遺産に認定された。

発　行／まちづくり大山
事務局／鳥取県西伯郡大山町今在家６１１
TEL.0859-53-8139
e-mail matidukuri.d@sea.chukai.ne.jp
2017年3月 初版発行
歴史文化監修／杉谷愛象　自然監修／鷲見寛幸

歴史の道「大山道（だいせんみち）」

日本最古の“神坐す山”に生まれた「地蔵信仰」

奈良時代に編纂された「出雲国風土記」の国引き神話に、“伯耆国（ほうきのくに）なる火神岳（ひのかみのたけ）”としてその名が記された中国地方の最高峰、大山。中腹の大山寺に祀られている地蔵菩薩は、山頂の池から現れたとされ、水を恵み、現世の苦しみから万物を救うと信じられている仏様である。このため人々は、延命をもたらす「利生水（りしょうすい）」と地蔵菩薩のご加護を求めて大山に参詣し、無病息災と五穀豊穣を祈願した。大山寺本堂の奥に鎮座する「大神山神社奥宮」では、毎年7月 15 日に神聖な力を持つ山頂の池の水と薬草を持ち帰る「もひとり神事」が、1000 年以上脈々と続いている。生きとし生けるもの全てを何度でも救う地蔵菩薩と、大山から生まれる命を育む水が密接に結ばれた大山独特の地蔵菩薩信仰は、鎌倉時代以降、大山信仰として伯耆国のほか、山陰・山陽諸国に広がっていった。

大山の原初信仰を伝える「もひとり神事」

雲海に浮かぶ大山

信仰と結びついた全国一の牛馬市

「大山寺博労市図（一部）」／鳥取県立博物館所蔵

標高 1729mの大山。その中腹に位置する大山寺は、奈良時代の 718 年（養老2年）に創建されたと伝わる。本尊は、万物を救う仏様の地蔵菩薩。平安時代、大山寺の高僧・基好上人（きこうしょうにん）が、人の暮らしを守る農耕に欠かせない牛馬の安全を祈願する守り札を配り、山の中腹に広がる牧野で牛馬の放牧を奨励したため、大山寺を核とした牛馬信仰は広がっていった。人々は牛馬を曳き連れ大山寺に詣で、守り札をいただいた。そして、牛馬にも「利生水」を飲ませて延命を祈り、守り札は牧舎の柱に貼って牛馬の健やかで安全な生育を願った。

その頃、多くの参詣者が行き交う大山山麓では、牧野で育った体格の良い放牧牛が人目を引くようになり、大山寺の春祭りなどで、参詣者の牛馬を含め「牛くらべ」「馬くらべ」が開かれるようになる。これが発端となり、鎌倉時代以降に牛馬の交換や売買が盛んに行われ、やがて牛馬市に発展したと伝えられている。江戸時代中期には、大山寺の庇護のもと、大山寺境内の下にある博労座で「大山牛馬市」が始まった。信仰と結びつく牛馬市は、江戸時代後期、福島の「白河馬市」、広島の「久井牛市」と並び“日本三大市“と称され、明治中頃には、年間1万頭以上の牛馬が商われる日本最大の市へと発展した。その後、「大山牛馬市」は鉄道の発達などで昭和 12 年に幕を閉じるが、往時に培った県産和牛の品種改良技術は、現在の鳥取和牛誕生の礎となっている。

江戸時代後期の様子（伝歌川広重作　扇絵　「大山寺博労市図」／鳥取県立博物館所蔵）

昭和6年の様子

「大山信仰」と牛馬市をささえた「大山道」と人々の暮らし

中世以降、地蔵菩薩を祀る大山は、“命を育む山”として、西国諸国からも広く信仰を集めた。多くの参詣者や牛馬の往来を支えたのが、大山寺から放射状にのびる「大山道（坊領道、尾高道、溝口道、川床道、横手道）」だ。5月24日（元は旧暦4月24日）に行われる大山寺の春祭りと、多い時で年5回開催された牛馬市の前後は、国境の番所での通行人改めに特別な計らいがされたほど、大勢の参詣者が往来した。このため、大山道の各道沿いには、道標の常夜燈や地蔵菩薩にちなんだ一町地蔵、石畳や宿場の町並み、農村景観が今も残る。また、参詣者の携帯食に親しまれた「大山おこわ」や、大山寺の基好上人が栽培を奨励したと伝えられる「大山そば」は、地域を代表する食文化として根付いている。大山道でつながる山麓のエリアでは、五穀豊穣や健やかな子供の成長を大山に祈り、日々、“大山さんのおかげ”と感謝と畏敬の念を捧げ、大山を仰ぎ見る暮らしが営まれている。

❶坊領道（ぼうりょうみち）／淀江港、淀江宿及び御来屋宿などの地域を結んだ南北筋の主要な参詣道。

❸溝口道（みぞぐちみち）／出雲街道の溝口宿と大山寺をつないだ道。桝水別れで横手道に合流。

❹横手道（よこてみち）／山陽筋からの主要参詣道。沿道の地蔵石像のほとんどが、大山寺を訪れた山陽筋の人々が寄進したもの。

❷川床道（かわとこみち）／倉吉方面からの参詣者や牛馬を曳く博労が通った道。近世に篤信者が整備した石畳が今も残り、往時の姿をよく伝えている。

大山道道標（日下）

大山道道標（蚊屋）

❺尾高道（おだかみち）／当地域の中世の要衝であった尾高城と大山寺をつないだ古くからの参詣道。江戸時代には会見郡や米子城下町の商人が多く行き交う主要参詣道であった。識字率の低い時代、誰もが認識できるように手の向きで方向を示している。